



## 準備

10年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城・石巻」も、コロナウイルスの影響を受け、リモートで開催、最終年は来年度に持ち越すことになった。むつプロジェクトのリモート開催が予想以上にうまくいったので、今回も同様のやり方で、院生とともに企画準備委員会を立ち上げて準備した。

先立って、9月21日（月）13時～14時半、「むつプロジェクト報告と石巻・多賀城プロジェクト紹介」をZOOMで開催した。これは例年の研究会にあたる。8月に実施したむつプロジェクトの報告と、多賀城・石巻プロジェクト9年の紹介を行い、メンバーでの共有を行った。

## 10月3日(土)午前 DMAT 隊員が再び臨地に立ち知り得たこと

10月3日（土）10時-12時は、「災害直後の応急体制に携わった経験から今思うこと ~DMAT 隊員と被災者・行政が見た多賀城」として、増尾佳苗さん（大津赤十字病院 DMAT 隊員・災害看護）が「災害救護者が再び臨地に立ち知り得たこと」、丸山隆さん（多賀城市建設部都市計画課次長・課長）が「被災者の目・行政の目を見た東日本大震災の記憶」を語ってくれた。私たちのプロジェクトが初めて被災地に入ったのは発災から半年後であり、多賀城に入ったのは1年半後だった。被災直後の多賀城はどんな様子だったのか、あらためて理解したいと思

った。

DMAT とは、災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team）のことである。1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災で、初期医療体制に遅れがあり、もしも平時の救急医療レベルの医療が提供されていれば、救命できた命が500名はあったとされた。これを教訓に、行政機関、消防、警察、自衛隊と連携しながら、救助活動と並行し、医師が災害現場で医療を行う必要があると認識されるようになった。

最初は東京 DMAT として始まり、2005年、厚生労働省により日本 DMAT が発足した。医師、看護師、事務職員、パラメディカルから構成され、災害拠点病院から選出されて訓練を受け、試験に受ければ隊員となる。隊員となった後も、5年ごとに研修と試験を受け、現在、9千人の隊員がいるという。大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね48時間以内）に出動する。

増尾さんのチームは、医師2名、看護師3名、事務職3名の計8名で編成され、病院の救急車両2台で、3月13日15時50分に出発した。出動先は決まっておらず、ただ「北へ向かえ」と言われていた。増尾さんは原発災害の訓練も受けていたので、とりあえず線量計を積み、福島原発の状況を把握しながら、風上にあたる日本海側のルートを選択し、移動中は車両の外気を遮断して走行し、一晩かけて移動した。

3月14日の13時半、大船渡津波、福島第3原発爆発の連絡を受け、多賀城の霞目駐屯地に到着した。夜中で真っ暗だったの

で、何も見えない。ただ海のにおいがしていた。



15日から活動開始。先に着いていた高松赤十字病院看護班に合流し、石巻市民病院のヘリコプターで運ばれてくる被災者の治療と受け入れ病院の選定、病院までの搬送支援を行った。百名ほどの患者受入れを東北大学病院がほとんど一手に引き受けていた。その次の受け入れ先は石巻市民病院だったが、よくもそんなに多くの患者の受け入れができるなど驚いた。その夜、研修で知り合った成田赤十字病院のDMAT隊員から「こんな状態だよ」とメールが来て、石巻日赤の外来ロビーの写真が貼られていた。こんな状態でよく受け入れができるなどとさらに驚いたが、とにかく屋根のあるところへと患者を送り続けた。

2日目、パタリと被災者が運ばれてこなくなつた。わずか4人。救護スタッフが50人近くいるのに、このままここにいていいのかと疑問に思った。前日対応した人たちの話では、海岸沿いの町は壊滅的な被害を受け、沢山の人が津波に流されてしまった

ということだった。「急に誰も運ばれてこないのはおかしい。地域に巡回診療した方がいい。待ってられない」と思った。災害対策本部に報告し、巡回診療の許可を得た。二次災害に巻き込まれる可能性もあるため、隊員3人で行くことにした。外は驚くような惨状だった。車を前進させるのも困難な状況だった。上からぶら下がっていた車がドンと落ちるようなこともあった。人っ子一人いない。耳を澄ましても、風の音以外、何も聞こえない状況が続いた。初めて人を見たのは、マックスバリュの前に整然と列を作って並んでいる人々だった。避難所を探そうと、カーナビを頼りに小学校を目指した。

道中、報道されていた多賀城体育館の前を通ると、国境なき医師団や他の救護班の車両があり、報道されているところは大丈夫だと判断し、救援車両が停車していない小さな小学校(蒲町小学校)を見つけた。地域の方々に運営がなされ、壁にはすでに組織図が貼られていたのには驚いた。地域の人々は助け合っていた。二時間ほど診療活動をし、霞目駐屯地の近くの小学校に行った。

体育館には300人前後の避難者がいて、体育館内は暗く、湿った床に濡れた毛布が置いてあり、布でくるまれた赤ちゃんが寝ていた。少数で沢山の方々を診ることは難しいと判断し、トリアージを行った。この地域の訪問看護をしているという若い女性が声をかけ、手伝ってくれて助かった。活動を終え、こんな状況を駐屯地の人たちはまったく知らないの、写真を持ち帰って報告した。

その日は、夜間対応はないと自衛隊から

巡回診療内容	震目駐屯地 <sup>キ</sup> 。A小学校、B小学校体育館避難所	多賀城市内C小学校体育館避難所
避難者数	A60名 B300名 教室にも多数、プライバシーの確保できず	400名程度 プライバシーの確保できず
ライフライン	すべて寸断	電気不通、水道1回日給水車巡回
食糧・物資	毛布、衛生用品の不足、 水500ml1本、クッキー (3日間の食糧) 十分な食糧、物資配給はなし	3/15: おにぎり1個、パン1個、ヨーグルト 1個 3/16: 栄養補助食品1個、飲物1本、コッペ パン1/5個 配給時期にムラがあり困っている。
暖房設備	なし 湿った床に直接毛布がひかれていた 状態 非常に寒い	石油ストーブ6つ、灯油に限りあり。非常に 寒い。床にダンボールがひかれており、そ の上に毛布がひかれていた。
医療班診療	地震発生後4日目で初めての診療、避難 所から宮城県に何度も要請しているが来な い。	町内の開業医が1回診察、継続的な診察 はなし。そのため被災者の不安感が強い。
診療患者数	9名	52名

連絡があり、待機している医療テントの隣にある暖房付きの自衛隊のテントで数時間仮眠させてもらえることになった。被災者搬送用の担架の上ではあるが、久しぶりに足を伸ばして眠れると安堵したのも束の間、震度5強の余震があった。地域の二次災害のことも気になり、あまり眠れず夜明けに医療テントに戻ると、医療テントが雪と地震で倒壊していた。テントの中の医療用機材も倒れており、いつものようにここに寝ていたら危なかったと震え上がった。

活動3日目、巡回診療を行ってから帰還したいと、災害対策本部の許可を得た。カーナビとラジオを頼りに、救援の来っていない地域の学校や体育館を探し、多賀城小学校にたどり着いた。400人以上避難者がいて、救援物資が発災後1回しか届いておらず、

各家族にマリービスケットの袋が一つずつだけだった。慢性疾患の人たちの薬もなく、濡れたままの衣服で赤ちゃんを抱いているお母さんたちがいた。「本当に、何ということだろう」と思った。被災した開業医が聴診器だけを持って回っていた。後に、多賀城で丸山さんが「とにかくできることをする」という言葉を聞いたが、まったくそのとおりに現地の方々がそれぞれにできることをしていた。

石巻市民病院に寄ってから帰りたかったが、道路が寸断されていたため、諦め帰還した。大学院で斎藤清二先生から、「思い出せるなら、被災者の語りを書き出してみたらいい」と教わり、書き出したものを紹介する。

・Aさん「春休みで帰ってきていた大学生の息子が1階にいた。何度も携帯にかけているが、消息がわからない。自分は必死に屋根にしがみついていたが、シューっという音とともに潮が引いてね、すごい勢いでおじいちゃんや赤ちゃんや子どもが流されていくのを見てしまった。どうすることもできなくて、ただ叫んでいた。なんで自分が助かったのだろう、死ねばよかった。」

この方は乳がんの末期で、最期を一緒に過ごそうと、東京にいた大学生の息子が家に帰ってきたところだった。

・Bさん「地域の訪問看護をしています。自宅も、いつも訪問している家も流されてしまって…。自分は無事ですが、みなさんの消息がわからないんです。私は避難している場合ではないと思いますが、どうしようもなくて…。せめて何か手伝わせてください。」

自分の担当していた患者がここにいるというので、その方に会いたくてやってきたのだと言う。Bさんには小さな赤ちゃんがいることを後で知った。

・Cさん「入院してたら病院ごと波かぶって…。砂だらけで濡れてて寒い。とにかく寒い。3日間でおにぎり1個、水はおちょこ1杯。助かった方がつらい。」

・Dちゃん「家の前で遊んでいたら津波がくるって誰かが叫んでいた。お母さんと友達と一緒に走った、走った…。でもね、全速力で走っても、膝のところまで波がくる。怖かったけど、とにかく全速力で走った。津波に勝ったよ。」

お父さんは行方不明で、お母さんが泣いておられた。「膝より上に来たら津波に襲われるから、膝より下で逃げ切りなさい」と常日頃から言われていたそうだ。

・Eさん(自治会長)「4日経つけど物資も救護もこない、自分たちだけで残った家から持ち寄って炊き出ししている。前に訓練しといてよかった。自分がしっかりしないと、この地区はもたねえ。来てくれてありがとう。次はいつ来てくれる？」

この方は、組織図をつくった人だったが、「次はいつ来てくれる？」という言葉にやられてしまった。一緒に行ったA隊員はこの言葉が頭の中でこだまして抜けないという。「とにかく今を何とかしなければ」という状況で動いており、組織化されていないなかだったので、次にどこかが来るという保証もなく、「この状況を災害対策本部に伝えます。必ず次の隊員に来て欲しいと伝えます」としか言えなかった。

帰還すると、こちらはいつもと変わらない日常で、普通に仕事をしていたが、活動中出会った人々のことが気になって仕方なく、夜は、被災地で活動している夢ばかり見た。夜寝ると、まだ多賀城にいて、朝目が覚めると、「ああ、戻っていた」と思う。自分自身もバランスを崩して、仕事に集中しないとやってられないという感じだったが、共に活動したA隊員の様子がおかしい。「仕事をやめて多賀城に戻りたい」とひたすら訴える。戻って活動を続けることは悪いことではないと思うが、彼は、眠っておらず、尋常でない顔をしていた。何度も話し、「少し体験をまとめてごらん」

と課題を出した。自分もしんどかったが、彼ほどストレートな反応はなく、「どうしてなんだろう」ともやもやしていた。そんな時、書店で『臨地の対人援助学』と出会い、大学院に行ってみることにした。そして、このプロジェクトに参加した。

もちろん多賀城を希望し、その歴史・文化を学んだ。あらためて被害状況を実感し、他の被災地と比べて考えてみた。多賀城では行政が体育館を回っていて、行政の批判をする人が一人もいなかったことが印象に残っている。フィールドワークでは、NPO「タガの柵」によるガイドツアーに参加し、街を歩きながら、被災前後の写真を見ながら話を聞き、各所に残る津波の爪痕や末の松山などの史跡を見て回った。津波被害の地は新たな新興住宅へと変化していた。また、被災者が一息つける場にとカフェを開店したコトリコーヒーにも行った。皆、口を揃えて「今ここでできることをやる」と言っていた。

プログラムを通じて丸山さんと出会い、「今できることをやる」に加え、「公僕は寝食を忘れて市民に尽くすはダメです」という言葉を聞いた。自分たちはそれだったが、本当にそれではいかなかったと思った。依頼、DMATの研修では、必ずそれを伝えている。

再び臨地に立ち、当時不思議に思った謎が解けていった。なぜマックスバリューに人が並んでいたのかは、コトリコーヒーのオーナーが教えてくれた。仮再開で、「お米を売ります」とアナウンスがあったのだそう。だ。「被災者が弱者ではない」という

言葉には衝撃を受けた。最初は受け留めきれなかった。

8年間のつながりから地域に根差してきたプロジェクトに院生が参加することで、対人援助職としての価値・姿勢を一から問い直す機会を得た。その地に立ち、生き抜くための知恵・気概からパワーをもらった。当時自分たちが見ていたものに対し、新たな気づきを得ることで、新たな物語の再生となった。現場で見つめて、感じて、考えたことを今までの経験と融合させて語り直すことが証人となることの意味だと思う。気づけていない大切なことがまだたくさんあると確信し、修論に取り組んだ。

## 再びその地に立ってわかったこと



なぜ津波で半壊していたスーパーに並んでいたのか

スーパーがオープンすると地域にアナウンスがあったのですよ  
コトリコーヒーのオーナー



国道沿いの歩道橋で一晩明かしたと言っておられたのはなぜか

近くに高い建物がなく津波から逃げた人々が歩道橋で一晩を明かしたのですよ  
タガの柵松村さん



なぜ多賀城の人々はあまり不満を言われなかったのか

行政が大きな被害を受けなかったことですぐに支援できたことだと  
思います  
上山先生・丸山さん

当時の状況を振り替えるために、増尾さん自身もゼミの仲間にインタビューしてもらい、また、あらためてA隊員にインタビューして、一緒に振り返ることもした。そこで明らかになったことは、凄惨な被災の状況で、自分のことに眼が向いたままだと、パニックになったままだが、そこで被災者に注意を向けることができれば、その人の力が感じられ、それにこちらが支えられる形

で、必要なことが見えてくる。人間的な出会いを相互にエンパワーされる関係にすることがポイントだった。あらためて、この言葉が『臨地の対人援助学』にあったことを認識した。被災者は弱者ではないのである。

## プロジェクトの学びを論文へ

災害現場の過酷さ

私とメンタルの変調を訴えた隊員との違いは何か？

救援活動における自分への問いと実践被災者の語りとの関連を分析

「被災者に注意を向けていたか否か」「行動力と省察的実践」の違いがわかった

共にその地に立っている人間的な出会いをエンパワーされる相互性に置き換える関わり

増尾さんの話を聞きながら、あらためて災害直後の様子に震える思いがした。そんななかを生き延びてきた多賀城の人々に敬意を禁じ得ない。また、そんななかにもリスク覚悟で救援活動に駆け付け、混沌としたなかで、ありとあらゆる工夫を重ねながら被災者との出会いを成し遂げてきた救援者たちにも深く頭が下がる。中長期支援からは見えない光景だった。

## 被災者の目・行政の目で見えた東日本大震災の記憶

次の話題提供は、丸山隆さん（多賀城市建設部都市計画課次長・課長）による「被災者の目・行政の目で見えた東日本大震災の記憶」である。今後の災害においてとても参考になる内容なので、詳しく紹介したいと思う。

丸山さんは、多賀城市立図書館の館長をしていた時、このプロジェクトに出会い、たった1回だけのプロジェクトではなく、十年の継続的な絆プロジェクトであることに感動し、受け入れを即決したという。以来、十年に渡る交流を続けてきた。

## 被災者目線での震災記憶

あの日は中学生の長女の卒業式だったので、1日休暇を取っていた。午前中に式が終わり、午後から高齢の母親を連れて、ホームセンターで買い物をしていた。午後2時46分、その瞬間が突然やってきた。過去にも宮城県沖地震や宮城北部地震など大きな地震を経験していたので、多少の揺れでは驚かない免疫がついていたが、あの日の揺れは、かつて経験した地震の揺れとは比べ物にならないほどの大きなものだった。揺れ始めて、数十秒で店内の照明が全て落ち、一斉に店内のお客や従業員が外に出ると、さらに強い揺れが襲い、1分経っても揺れは収まらず、2分経っても揺れ続け、「いったいいつ収まるんだ！」と心の中で叫んでいた。

阪神淡路大震災はマグニチュード7で15秒間の揺れ、東日本大震災はマグニチュード9で3分間に渡る揺れだった。

やっと揺れが収まったと安堵したのも束の間、瞬時に津波が来ると思った。しかし、その時のイメージは、1mか2m程度で川の水位が少し高くなるくらいかなというものだった。これまで何十回となく津波警報が出たが、いつも数十センチ程度だった。

揺れが収まり、父親が1人、川沿いの自宅に残っていたので、余震が何度も続く

中、母親と一緒に実家へと車を走らせた。その間、ラジオでは「岩手県大船渡市に大津波が押し寄せ、壊滅的な状況です」と聞き、不安がよぎった。「もう仙台新港に津波が到達していい時間ですが」という言葉を聞き、緊張しながら海に近い実家へ逆走した。

実家に着くと、父親は裏の高台に地域の人たちと避難したと玄関にメモ書きがあり、すぐに母親と一緒に高台へと登った。あの日、朝は晴れていたが、曇って雨が降り、やがて雨は雪へと変わった。30分ほどすると満水の川の水が海へと引き始め、川底まで見えた。その後、第1波、第2波と津波が遡上し始めた。

あっという間に堤防からあふれ始め、接岸していたたくさんのボートが上流へと流れていき、橋の欄干にぶつかり、バリバリと音を鳴らしながら壊れていった。また、対岸の石油コンビナート基地から、タンクローリーが堤防を越えて、実家の目の前に流れ着いた。さらに、いつも通っていた生活道路から、家が流れてきた。自分の車も、津波でどこかに流れていき、高台の周辺は水深2mほどの津波で、陸の孤島になった。津波が引く夕方までの4時間ほど、吹雪の中に立ったままだった。

夕方、がれきの間を通り抜け、近くの5階建てのホテルに避難したが、地域は停電で真っ暗闇。しかも数分ごとに起きる余震で、眠れない不安な夜を迎えた。21時頃、暗闇の世界だった窓の外が、急に明るくなった。窓を開けると、川向いの石油コンビナート基地の石油タンクが爆発し炎上していた。隣接してガスタンクもあったの

で危機感を感じたが、自衛隊が救援に駆け付け、隊舎に二次避難させてもらった。人は人生の中で経験したことのない光景を眼にしたとき、悲しみとか怒りという感情を越え、その光景を受け入れることができなくなるものだ。

3.11は東北の者にとって絶対に忘れられない日となった。大地震、大津波、原発事故。映像として、活字として、あふれるほどの記録が残され、全世界に報道された。2日間、自衛隊に世話になり、3日目の朝、歩いて塩釜の自宅に戻った。ここまでが、被災者目線の震災記憶である。

### 避難所での対応、行政目線、教訓

3日目の夜から、300名近い人が避難した中学校体育館の避難所で、班長として約1か月、被災者の対応をした。震災の日の午前、体育館では卒業式があったので、壁には紅白幕が掲げられたままで、椅子が隅に置かれていた。

2日間着任していた職員に状況を聞いたところ、ほとんど寝ていない、食べていない状況であることがわかった。「このままでは職員全員が同時に倒れてしまう。何とかしなければ」と思った。さらには、最初200名程度の避難者数だったものが、追加で100名受け入れることになった。

1週間過ぎると物資は徐々に増えていったが、最初の1週間は、なかなか物資が届かず、1日におにぎり2個だけとか、パン1個程度しか配布できなかった。災害対策本部から細かな指示は一切なく、あるのは、医療派遣、食料到着時間、会議の連絡のみ。いつ寝て、いつ食べて、いつ休むの

か、避難所運営の方法については全て現場で自分が判断するしかなかった。

避難所で最初にしたことは、職員に食べさせることと寝かせることだった。2日遅れで着任したことから気づいたことだった。市職員と全国自治体からの派遣職員は、過酷な労働環境にいた。先が見えない、終りのない24時間対応で、数百人の世話と避難所運営のために、毎日3～4時間しか寝ていなかった。また、食料物資は被災者のために届けられたものだからと、最初の頃は罪悪感からか、職員は積極的に食べようとしなかった。さらに、避難所では被災者が寝れずに起きているので、職員はその世話のために寝てはいけないという意識が強く、皆で動き、皆で疲れていた。皆で同時期に倒れてもおかしくない状況だった。

まず、「我々は被災者のために動いている。食べて、寝なければ、倒れてしまう。被災者のために働ける体力を保たなければならぬ。いっぱい食べてしっかり寝る。それは悪いことではない」と意識改革を行った。食料は被災者から離れた調理室に搬入し、職員には腹いっぱい食べさせた。休憩や就寝の時は、被災者と同じ講堂内の本部席脇だったが、それでは落ち着かないし、職員が休んでいる姿はあまり見せられないと思い、体育館ステージ裏に専用の寝床を確保し、交代で5時間は休ませた。

当初、体育館内は被災者で溢れ、通路がなく、人と人との間を行き来する乱雑な状態だったが、途中で被災者を100名追加で受入れることになり、一晩考えて交通整理を行うことにした。

① 全員に「すみません。今から新たな被災者の方を受け入れします。このままでは入らないので、一度立って頂き、協力をお願いします」と説明し、体育館内を整理した。椅子で外周通路、テープで中通路、横通路等を作り、夜間でも自由に安全に行き来できるように通路を作った。

② 学校長と交渉し、ペット同伴の被災者専用の教室を確保した。

③ 学校長と交渉し、インフルエンザに感染した家族を隔離する教室を確保した。

④ 体育館の床は冷えすぎるので、高齢者を武道場の畳の部屋に移動させた。

⑤ 自宅に避難している在宅避難者と避難所のトイレ用の水を確保するため、プールの出入りを開放した。

⑥ 余震が続き、照明の真下が危険なので、人が入らないよう危険サークルを設けた。

## 困ったこと

・高齢者のトイレ問題。学校のトイレ、仮設トイレはほとんどが和式トイレで、足腰が悪い高齢者は、座るのが大変だった。和式を洋式のように使える機材の調達が難しかった。

・日赤毛布1枚ではだめ。5枚程度必要だった。寒さで体育館の床は、物凄く冷える。毛布の銀紙袋を足に巻いてもらった。自衛隊からの毛布が人数以上届き、複数枚配布でき助かった。

・電気、ガス、水道、店舗、ガソリンすべての機能が停止。支援物資の届かない在宅避難者も大変だった。食料を譲ってほしいと来られたが、人数分ぎりぎりしか避難所に届かなくて、渡すことが出来なかった。

後半は余っている時には、そっと差し上げた。

・消費期限ぎりぎりの食糧が届く。パン、おにぎり、飲み物。温かな物が提供できない。地元区長が自分の畑の野菜等を持ってきて、集会所のガスボンベや鍋を搬入し、炊き出しを毎日してくれ、大変助かった。

## 被災者への対応の工夫

避難所開設時は、物資搬入、トイレ掃除、食料配布は、すべて職員と区長の有志で行った。大変な思いをした被災者という観点から何もさせなかった。しかし、被災者の一日は、寝て、食べて、掃除に行き、休み、寝るの繰り返しで、避難所内のことは何もせず、職員の負担はかなりのものだった。そこで、被災者の意識改革をしようと、連帯感を作る行動を起こした。

・通路を作り、3班に区切れたので、動ける人には作業を手伝ってもらった。

・食料や物資の搬入、受け渡し、トイレの清掃を当番制にした。

・何もさせないのではなく、協力をもらう。自分は被災者だからではなく、そのような中でも人のために動く、尽くす喜びを持ってもらうという啓発を行った。

・真冬で夜寒くて眠れず、毎晩ストーブの周りに十人位ずつ椅子席で暖をとる人たちがいた。深夜の0時とか1時、2時に巡回しながら、ストーブ懇談会で毎晩、被災者と語り合った。職員の立場、同じ被災者の一人として避難者の半分以上の人と話ができ、沢山の辛い思いを聞き、共感することができた。

・各地から支援物資が届いた夜の夕食前に、ステージからマイクで紹介するようにした。「今日、配布したバナナは、避難している方の息子さんが東京の築地から避難者の皆さんの分もと届けてくれたものです」「今日は、遠く青森からマイクロバスに乗って、野球少年たちが衣類をたくさん届けてくれました」など、全国からの応援が伝わるようにした。シーンとしていた会場に、感謝の拍手が響いた。

また、いろいろな人がいるので、困ることもあった。

・避難生活に慣れてくると、自宅から電気ポットや電気製品を持ってきて、体育館内のドラムに繋ぐので、体育館のブレーカーが何度も落ちた。「次、ブレーカーが落ちたら電源を入れませんよ」と呼びかけても、十分後にまた落ちた。仕方がないので、すべての持ち込み電気製品を撤去するまで、電源を入れなかった。以来、ブレーカーは落ちなくなった。

・避難者同士で喧嘩が始まった。すぐ仲裁に入り、「そんなに嫌ならどちらか避難所から出てください。それが嫌なら端と端の一番遠いところへ移動してください！」と厳しく諭した。最終的に、両者素直に応じてくれた。

・ある時期から、5名くらい近隣の中高生が1週間位、配膳の手伝いに自主的に来てくれた。お礼に余ったおにぎりやパンをあげていたら、「なんであげるんだ！被災者に届いたものだろう！」と怒鳴った人がいた。悲しくなったが、「あなたたちのために、真心で手伝ってくれているんだから」と伝え、渡すことをやめなかった。

このように、時には厳しく出来たのも、同じ被災者として語り合い、職員として理解してくれたからだと思う。

### 避難所の振り返り

- ・東日本大震災は冬場の災害。同じやり方は、夏の災害には使えない。
- ・全国から届いた食料は、寒かったので車庫や外のテントに大量に保管できた。気温が高いと、すぐに腐敗し、保存できない。おにぎり等は、消費期限が当日限りのものが多かった。
- ・地震だけなら局地的だが、津波被害は何十万人という広域被害になり、対応が変わる。ピンポイントの対応ができない。
- ・避難者には避難所避難と在宅避難があり、物資の確保は在宅避難者のほうが厳しい。
- ・被災して一番大変なのは水の確保とトイレの対応。
- ・電気、ガス、水道遮断によるガソリン・灯油の燃料確保。
- ・避難所の灯油は、近隣に自衛隊があつて協力を得られたので、助かった。そうでなければ、燃料確保はかなり厳しい状況となった。
- ・自分たちは被災者の世話で精いっぱい、子どもたちの存在への気づきが足りなかった。そんな時、図書館に勤務する職員が、段ボール箱に30冊ほどの絵本等を持ってきてくれ、対策本部のテーブル脇に置いてくれた。子どもたちが本を手にし、笑顔になった表情が忘れられない。本の力を感じ、子ども目線に欠けた避難所運営をしていたことを深く反省した。以後、本部

のテーブルに子どもたちが喜ぶ菓子を置いたり、本部テントに届く物資から、子どもたちが喜ぶ菓子を確保し配布した。

### 震災を経験し今、思うこと

震災翌月の4月7日、長野県から1週間応援に来てくれた県職員に御礼のメールを送った。その時の気持ちが、被災者として、職員として、自分の思いを素直に表していると、丸山さんは最後に紹介してくれた。

たった数分間の揺れが、何十年もかけて築き上げてきた電気、ガス、水道、交通網といったライフラインをズタズタにしました。

「破壊は一瞬！建設は死闘！」と言いますが、災害は容赦なく人の命を奪い、人の心を傷つけ、人の心をズタズタにします！

しかし、災害を受けた方々は、たくさんの方々からの支援と励ましを受けて、前に向かって頑張ろう！と心の復興から、まず立ち上がります！

私は今回、被災者として、又、被災者のお世話係として、両翼の立場を経験しました。震災の体験者となり、震災の生き証人となりました。

人生の中で、災害に会わないことに、こしたことはありませんが、1ヶ月が過ぎようとしている今、振り返って思うことは、何百人という方々との出会い、語り合い、励まし、感謝の連続だったということです！

たくさんの方々との出会いの中から、「ありがとう！」「感謝！」を学ばせて頂きました！

おかしなことを書きますが、私は全く疲れておりません！確かに肉体的な疲労の蓄積は多少ありますが、心はとても充実し、元

気です！

なぜなら、「悲惨」という言葉を上回る「感謝の出会い」があったからです！

九州から2日間かけて炊き出しに来て頂いたり、北海道苫小牧市からフェリーに乗り、車で炊き出しに駆けつけて下さいました！

又、遠く尾瀬の地から早朝出発し、ガソリン事情が悪い中で、ポリタンク3缶にガソリンを入れて、衣類や食料を積み込み運んでくれた老夫婦の方がおりました。

さらに、青森から少年野球チームのメンバーがマイクロバスで衣類を持ってきてくれました。更に、東京からも衣類関係の同業者に声掛けをし、高級な衣類をたくさん持ってきてくれた若手メンバーがおりました。

両手を握って感謝し、車が見えなくなるまで両手を振って見送りました。そして、できる限り個人的に感謝のメール、感謝の電話をさせて頂きました！

何かをしなければと思うことはできても、直ぐに行動に転じて遠くから来ていただくことは、本当に尊いことです！だから来て頂いた皆さんに、本当に宮城を支援してよかったと、強く心に刻んで欲しかったし、それは次への力になると思ったからです！

又、被災者のご親戚の方が我々の支援に感謝され、秋田県からは漬物が、山形県からは避難所で不足していた大根などの野菜が、東京からは避難所で生活する祖母を訪ね、避難所の皆さんにたくさんのバナナが届けられました。

そして先週からは、愛知県、岐阜県、秋田県職員の皆さんが先陣を切って復興支援に来て頂き、新たな出会いを積み重ねることになりました。

限られた時間の中での、一瞬の出会いかもしれないかもしれませんが、私の今後の人生の中では、皆さんとの出会い、笑顔、言葉は生涯忘れることはありません！

今日は移動日となり、帰路に着かれることとなりますが、次に来られる機会があれば、どうか東北の良いところも堪能して頂ければと思っております！

昨夜、炊き出しの方々と素晴らしい語らいの場が持てて、本当によかったですね。炊き出しの皆さんのご苦勞が、本当に報われた最高の励みだったと思います！ありがとうございます！

間もなく体育館に行きますが、今日は避難所統合に向けた班長会があり、ゆっくり時間がとれるかわかりませんので、メールで気持ちを送らせて頂きました！

最後に、本当にありがとうございました！復興までにはかなりの時間を要すると思いますが、必ず元気な東北、強い多賀城を築き上げ、支援して頂いた皆さんに感謝の恩返しをして参ります。丸山

これが十年経った今も、変わらない自分の思いである。被災者は弱者ではなく、震災を乗り越えたのだから本当は強いんだと、東北人の一人としてあの経験を活かしながら、これからも頑張っていきたい。

## 十年経過して懸念すること

- ・津波や地震の痕跡がなく、実感できない。
- ・宮城の小学生は、大震災を知らない世代。東日本大震災は、関東大震災と同じ歴史の教科書の史実となっている。

- ・市職員の半数以上が、災害対応未経験世代になりつつある。
- ・備蓄等の意識、防災マップ等は作成されたが、使いこなせるか不安。

丸山さんの話から、被災者であるというご自身の経験に軸足を置きつつ、システム全体を視野に入れ、暖かくかつ公正な心で避難所運営のリーダーシップを取り、どんなにか大変だったであろうに、増尾さんが「他の市町村と比べ、多賀城では行政批判がなかった」と驚いた理由は、行政が大きな被災を免れ機能できたからということ以上に大きな意味があったのではないかと思う。丸山さんの「生き証人」としての証言には、今後も語り継いでいくべき重要な教訓が満ち溢れている。私たちのプロジェクトに対しても、いつも暖かく対応してくださっていることの根底にある丸山さんの人としての姿勢をあらためて感じ入ったお話だった。

## 10月3日(土)午後 ミニシンポジウム「復興を支える民話の力」

13時-15時は、民話とともに東日本大震災を乗り越えた人々の声と思いをつなぎ合わせ、全国に発信してこられたみやぎ民話の会の方々と共に、復興を支える民話の力について考えようと、ミニシンポジウム「復興を支える民話の力」を開催した。まず、鶴野祐介さん（立命館大学）が「不条理に向き合う民話の伝承と再創造」について話した後、島津信子さん（みやぎ民話の会代表）が「復興と民話：みやぎ民話の会の活動を通して考える」、加藤恵子さん

（みやぎ民話の会会員）による宮城の民話語りの後、休憩をはさんで村本が「対人援助学からみた復興と民話」について話した。

## 不条理に向き合う民話の伝承と再創造

鶴野さんは、まず、物語とは何か、5人の視点ということで、片岡輝（語り手たちの会代表）、庄司アイ（やまもと民話の会代表）、小野和子（みやぎ民話の会顧問）、デイビッド・ヒューム（18世紀に活躍したスコットランドの哲学者）、ハンス・ブルーメンベルク（20世紀半ばに活躍したのドイツの哲学者）の物語についての言葉を紹介した。

片岡は、「語りによって、物語に描かれた多様な人生を追体験し、生きる知恵、人生の喜怒哀楽、挫折と成功、慰めと励ましなど、生を豊かにするものを分かち合い、学び合うと同時に、人と人との間に橋をかける役割がある」と言い、庄司は「民話のひとつひとつに根拠がある」、小野は「血の吹き上がる現実を支えられて、そこに物語は呼吸して生きてきたのだという実感が、私にはある」と言った。

ヒュームは、「すべてのことは謎であり、不可解であり、解き難い神秘である。」（不条理に遭遇したとき、その恐怖から逃れるために、また一縷の希望を与えてくれることを願って、人間は神を誕生させ、神に祈ったと理解できるのではないか）、ブルーメンベルクは「物語が語られるのは、何かを追い払うためである。放射線、原子、ウィルス、遺伝子のような不可視なものをどれほど知っていようとも、恐怖はなくなるらない。その漠然たるものに名

前をつけることが世界と交わる最初の効果的な方法である。命名し名前を使えば、そこで初めて漠然たるものについて物語を語り得るようになる」と言った。つまり、不条理に向き合い、これに抗する術（アート）として神を創造したところから、物語の創造と伝承が生まれた。これが語りの発生であると言えるのではないか。

東日本大震災後に、日本民話の会（2017）『東日本大震災一記憶と伝承』、第七回みやぎ民話の学校実行委員会（2011）『3.11 大地震大津波を語り継ぐために一声なきものの声を聴き形なきものの形を刻む』、KHB 東日本放送(2012)『3.11 を語り継ぐ一民話の語り手たちの大震災』（DVD）、やまもと民話の会（2013）『巨大津波一語り継ぐ-小さな町を呑みこんだ』、多賀城民話の会（2012）『忘れまい大震災』、石井正巳・やまもと民話の会（2019）『復興と民話の力ーことばでつなぐ心』など多くの記録集が生まれた。

コロナ禍の下、SNS 上に拡散される無数の物語は、不可視なものに対する恐怖を追い払い、不条理な出来事に対する怒りを発散させるためのものではないか、これは分断にもつながっている。これに対して、縁あって誰かとつながり、今ここに生きていくことの確認が必要なのではないか。その意味において、「つながりの物語」としての民話を語り聞くこと、新しい民話を紡ぎ出すことが大事なのではないか。これらが With コロナ時代に求められているということだった。

## 復興と民話:みやぎ民話の会の活動を通して考える

島津さんからは、みやぎ民話の会の紹介があった。ずいぶん前から、その土地に足を運び、物語を聞いてきた。山、海、風を感じながら、そこで生きてきた人々の話をそこで聞くことに意味があった。自分たちは、それを採訪と呼んできた。そうやって聞かせてもらったお話を文字にして、自分たちで語ってみたりもしてきた。1975 年に会を発足し、45 年の間、試行錯誤してきた。

1985 年頃、宮城県の依頼で、県内全市町村を訪ね歩き、民話の伝承の状況を 3 年間にわたって調査した。2,513 話集めて、そのなかから 500 話強の話しか載せられなかった。一人で 100 話、200 話、多い方では 300 話も語る人がいた。それぞれの生き方も素晴らしい。そのなかで、ナガウラセイキさんは、300 話語った。20 年経って 90 歳になった時、ナガウラさんにもう一度語り直してもらったところ、ほとんど変わることはないお話を語ってくれた。おばあさんから聞いた話をそのままに伝承してきた。それを 3 冊にまとめた。

年を追うごとに伝承の語り手と会うことが難しくなってきたので、一堂に会して皆さんに聞いてもらおうと、みやぎ民話の学校を開くようになった。2~3 年おきに進めてきたが、6 回までやって、7 回目を迎えようとする時に、東日本大震災が起こった。いったんはキャンセルにするなど紆余曲折があった。小野和子さんが「今開かなくてどうするの。震災をテーマに」と言ったが、会員は「それどころではないのではないの」「もう少し時間が経ってからでい

いのではないの」と悩んだ。迷った末、8月に南三陸で開催することにした。会場のホテルはまだ避難所になっていて、道路もズタズタだった。水が出るようになったのは、ようやくイベント日だった。

200名の参加者が全国から集まり、被災された6名が体験を語ってくれた。驚いたのは、その語り口が民話そのものだったことだ。会場の人も涙を流しながら聞いた。何もできないが、聞くことはできる。語った人も聴く人の真剣なまなざしに力をもらったと言ってくれた。そうして、鶴野先生が紹介してくれた冊子や映像記録ができた。第8回民話の学校を丸森で開催、この時は第7回では取り上げることでできなかった福島や放射能のテーマも取り上げた。双葉や飯館村からも参加して、語ってくれた方々があった。

アイさんは震災前から津波の民話を話していたが、自分たちに実感が足りなかったのではないかと思う。船越地蔵の民話で、海からずいぶん離れた山の麓に地蔵森というのがある。山の向こうが丸森で、丸森でもその話は残っていた。先人は地名や語りで自分たちの体験を残してきた。その時のご縁で、鶴野先生や村本先生、多賀城民話の会の方たちともつながった。

被災直後、民話で少しでも楽しんでもらえたらと避難所を回ると、お話よりおみやげのタケノコの煮物の方が喜ばれたが、1年経つと、「屁っこき嫁ご」に大笑いして、こんなに笑ったのは久しぶりだと喜ばれた。震災後7年目には、こちらの方が話を聞かせてもらって回った。私にはまだ7年。10年でも同じ思いだろう。復興の成果はあがったと思うが、それぞれ高齢にな

り、災害復興住宅に入るとひと安心ではなくて、孤独。十年ひと区切りと言ってしまおうが、区切りをつけるのはこちらであって、さ中にある人にはまだまだ続く。

震災をきっかけに新しい出会いがあり、仙台メディアテークとのご縁から、イベントや声の図書室プロジェクトが立ち上がった。小野和子さんの聞く姿を捉えた「歌う人」という映画も生まれた。ひとつの民話を取り上げて、そのおもしろさを語り合う民話遊話座も定例で開催している。「浜の民話」のイベントでは、震災前の浜の様子を思い浮かべてもらう。その他、東北歴史博物館とのつながりや、さまざまな民話の会との交流も深まった。飯館に戻った人へのインタビューの映像も撮った。まだまだやり足りないこともあるが、とにかく記録に残す、その時でなければできないことをしていきたい。

丸森は去年の台風19号で大被害を受け、山も川も田んぼもズタズタになった。「まさかここで」と誰でも思ったが、やはり、そこにも伝承は残っていた。阿武隈川が逆流し、山崩れの後、昔の人は災害の跡を残そうとした。「まさか」ということはなく、「どこにでもあったること」として民話は語ってくれている。

今回の震災を語り継ぐために、新しい民話が生まれるのだろうか。直接出会って語りを聞くことが重要。コロナ禍が終わればそんな場も作りたい。

島津さんの話の後、加藤恵子さんが宮城県の昔話「笠をかぶせたお地蔵さんのお礼」を語ってくれた。ナガウラさんの姪にあたる伊藤まさこさんによるお話だそう





- 山元町のいちご栽培性の高い農業経営が行われ、町の農業生産額の約半を占め、後継者確保率も第一位。1999年から25年かけ取り組んできた事業として、直売所「夢いちごの郷」を開業し、都市消費者との交流活動を通じていちご産地として大衆的アプローズをやってきた。いちご農家も、山元町のいちごをもちっと日本中に知ってもらいたい。「いちごの郷女の会」（文化施設）を立ち上げていた文化施設
- 震災で、互恵や協定により、129戸のうち125戸が被災する壊滅的被害を受けたが、東北一のいちご産地の矜持でもっと復興を目指す。
- 山元町のアプローズとして何としても復活させねばと思ふ。いちごで儲けていけば、若い人達もやる気になるだろう。やり方次第だ。東北一の産地なのに、いちごが産くならない、今頑張らないと、戻る暇がない。(p.98)
- 俺は、いちごが作れねえ。地方で頑張る。(p.97)
- 家族や地域の人々の力、界外の知人からの提供、公的補助、農協の助成金、ボランティアの方を借りながらハウスを再建
- 心強いのは、縁組が来てくれています。(p.102)
- 息子も事業でやる気になってくれた。・・・俺の経験を息子に伝えて、がんばる。(p.338)
- 12月には小さな仮設店舗の直売店が再開し1月には「復興のいちご」として急ぎ献上され、いちごは町の復興の象徴になった。
- 収穫できた時は、空想しかなかったけど、それ以上に俺が一番感じたのは、「夢いちごの郷」が開業した時、牛欄でまたお祭り騒ぎで賑わった。山元町のいちごがもう戻った。牛欄に帰ったのは知らなかったから。ほんとうに涙でね。一般口にした時、ただ涙が出た。言葉が出なかった。(p.337)
- ⇒東日本大震災復興交付金を利用した町物産の「いちご産地」(後編p.525)で経理の合理化や優良農地の集約等が行われた。山元町出身者が率先した若手中心の農業法人株式会社発起が立ち上がった。2018年には生産量が震災前の水準に回復、2019年農水産物直売所「やまもと夢いちごの郷」(文化施設)がオープン。



- 民話が危機状態を生き延びる支えに
- 民話活動の仲間とのつながりが、大きな喪失と苦難を生き延びる力に
- 民話の会のナラティブは、会を取り巻くゆるやかなネットワークのなかで共有され、鼓舞し合い、世代や地域を超える多くの人々を巻き込み拡がっていった(復興の力)
- 出版やイベント等を通じて、民話の会のナラティブは、山元町民とも共有された
- 民話を媒介に先人から繋がるものを認識することで、後世へと繋ぐ責任感へ
- 大きな喪失は、語り継ぎの力不足として使命感に転化
- 町民の証言から、さまざまな文化のサブシステムが装置として働き、共に喪失を悼み、励まし合い、復興に向けて人々が主体的に動き出す様子が可視化
- 山元町における神楽や紙芝居、文化財の再建、全国レベルで文化と歴史の創造。あらたな民話・伝承の始まり
- コミュニティの回復は、コミュニティの経験と反応についての物語を集合的に語ることに依存する(Landau and Saul 2004)。物語化
- 地域の共同性が色濃く残る地域において、災害後、個人を対象としたメンタルヘルスの介入が必要となる。これは、コレクティブレジリエンスを阻害する危険性はないか。最後に⑨心の復興は難しいをどう考えるか？



## ディスカッション

それぞれの話題提供の後、ディスカッションを行った。

島津さん：アイさんは、被災後しばらく連絡がとれず、生きていいのかどうかさえわからず、皆で心配していた。ようやく探し当て、会えた時、興奮状態で、「あら、アイさんって、こんなによくしゃべる人だったかしら」というくらい、いつになく饒舌に語り続けた。

5月頃から被災体験を記録しようと、紙も鉛筆もないようななかで、町民一人一人

を訪ね歩き、一緒に涙を流しながら、町の人々の体験をまとめていった。冊子にしようとして一生懸命取り組んでいたが、1年ぐらいいして、冊子ができると、「落ち着かないんだよ。涙が出てくるんだよ」と電話してくる。会のメンバーとお地藏さんを作ろうと決めて、いったんは落ち着いたが、お地藏さんも観音様もできて、よかったなと思っていると、また少し経つと、落ち着かなくなってくる。

求められればどんな所にでも行って、ご自分の体験を語られた。「同じ過ちを繰り返してはいけない。自分たちの体験を防災に役立てて欲しい」との一心で応じていたと思う。その波が収まると、また苦しくなる。そういったことを何度も何度も繰り返して、自分で出かけられないと、「しゃべりたくなかった」と電話がある。一緒に助かった犬と散歩していると、涙が出てくるという。そんなことが何度も何度もあり、十年繰り返してきた。あんなに語ることでできるアイさんですら、そんなふうに、波が押し寄せては引き、引いてはまた押し寄せてくる。民話など、発信手段のない人はどうだろうか。「十年ひと区切り」と外からは言うけれど、とても十年で終わりにできないと思う。

村本：鶴野さんの話を聞いて、阪神淡路大震災の時のことを思い出した。毎週、避難所の子ども遊びボランティアに通っていた。ある時、学校にあがらない小さい男の子が、怪獣の絵を描いた。「うー、大きな怪獣だね！」と言うと、「ボクね、ずっと考えてたんだ。どうして地震になったんだろうって。そしてわかったんだよ。地面

の下で、怪獣が大きな尻尾でドンってしたんだ」。理不尽なことが起きた時、人はそれを理解可能な物語にしようとして、神話が生まれてきたんだと感動した。

島津さんのお話にあった300話も語る人、すごいなと驚く。お話が頭ではなく、体に刻み込まれている。自転車に乗るように体に型が刻み込まれ、そこにのせて体験を語られたのではないか。被災体験を語られた6名のみなさんの語りも、ユーモラスな雰囲気を残し、民話として新たな語りができていた。民話の力はすごいと思う。それを、また若い人たちが受け継いで、別の形にのせていく。語り手だけでなく、聴き手である小野さんの姿も撮らなければという若い人の感性。ポストモダンというのか、物語は、聴き手と語り手の間に生まれていくという発想である。

最後にアイさんのこと。心理の専門家だったら、「トラウマによる過覚醒状態だから、そんなことはやめなさい」と言って、アイさんのやろうとしたことを止めたかもしれないと思う。でも、自分を鼓舞して頑張っていて、落ち込む、伝える、を繰り返された。その全部がアイさんの大切な人生。そこから波動が生まれ、目に見える大きな動きにつながっていく。専門家は、個人の病理として見ていくことで、そんな大きな集合体のうねりの可能性をつぶしていくのかもしれないと思った。

その一方で、山元町の記録にも含まれているPTSDになった人。アイさんのインタビューをしていた時に、たまたま隣の机におられた男性のことを思い出す。その方は、家を流され、家族全員亡くされた。復興住宅で引きこもっている男性たちは、子

どもをうるさがる苦情を言う。そういうのが嫌で、自分は毎日1万歩歩いて、ここにきて、新聞を読むのだとおっしゃっていた。

どうしても、こぼれてしまう人たちがいる。遠野物語99話の福二は、今で言うPTSDだったと言った人がいたが、喪失から抜けられないまま、あの世とこの世を彷徨っている。それでも、そんな人の存在も排除するでなく、含み込んでいくのが民話の力ではないか。山元町の記録のタイトルにもあるように、声にならないもの、形なきもの、沈黙など、語り得ないものをも含み込んで結び付けていく力を秘めていると思う。

場と空気を共有しながら人と人とが向き合えることは何物にも代え難いが、コロナ禍でこういう形であれ、民話の会のみなさんとつながれるのはありがたい。プロジェクトでも工夫していきたい。

島津さん：若い世代が、小野さんはじめ宮城民話の会に共感し、関心を持ってくれた。遊話座や小野さんの講演を聞いて、民話の持つ力の深さに気づくからだと思う。今や採訪ができず、語れる人もない現状だが、仮設住宅でも傾聴ボランティアがいて、聞くだけでなく、自分も学ぶことがたくさんあると感じている人がいると思う。そういう中から民話に興味を持つ人が増えてくれるといい。45年やってきて、この十年、ようやくその本当の面白さに気づいた。ある程度やってみないとわからない。是非若い人たちに関わって欲しい。

鶴野さん：今年の2月のシンポジウムは、

瀬尾夏美さんに来てもらったが、アーティストとしてのベースに民話や物語がある。陸前高田の人たちと触れ合うなかで物語が立ち上がっていき、それを表現する。映画活動の濱口さんも。これまでの民話のイメージとは違う新しい発想で、頼もしい。

島津さん：メディアトークを通じて出会った瀬尾さんと一緒に話を聞いていると、話の受けとめ方が違うと思う。とてもセンスが良くて、聴き取り方がすごい。そして、それを表現する。感心させられる。濱口さんの感性もすごい。自分たちは学校の教員で、学生時代から同じような形でやってきたが、違う分野や新しい人が入ることで、民話の深さや面白さも変わってくる。若い人たちの感性に期待したい。小野和子さんはそこについていける若いセンスを持っている。今年は月例会が3回しか開けていない。民話の学校を8回までやってきて、第9回をどうしたらいいのか。今できることをやっていかなければと模索中である。

加藤さん：震災で小野さんやアイさんが「民話に力がある」と言ったが、自分は、「えっ、そうなの!？」というところから始めて、今は、テープやDVDを文字化しながら、お話と向き合っている毎日。これを残す意味を考えると、今の人だけでなく、20年、30年後にも伝えていく。文字で記録することの大切さを感じる。十年後に読み返すと、また違って感じられるだろう。心の復興は10年や20年でできるものではない。一生のものだと思う。

村本：小野さんは、敗戦後、墨塗り教科書

に何も信じられなくなったという。権威や権力というものを。大人になって、民話を聴き、人々の生活に根差した民話の中にこそ信じられるものがあると採訪を続けられた。小野さんは、敗戦で失ったものを、民話活動を通じて取り戻していかれたのだと思った。加藤さんのおっしゃる「心の復興は一生のもの」、まったくそのとおりなのだと思う。

## 10/04(日)13:00~14:00 支援者交流会と振り返り

3日(土)の15時半~16時半は、増田梨花さんの司会のもと、阿部浩さん(ライオンズクラブ国際協会石巻中央ライオンズクラブ会長)が、石巻の復興についてお話くださった。現在、復興が進み、建物がどんどん建っていくものの、「心の復興」は進んでいないという。とくに大川小学校の話は辛く、とくに学校関係にある院生たちが振り返りで繰り返し言及していた。物語は目線によって異なる紬となる。4日(日)午前は、いつものように、団士郎漫画トークだった。来年度展示予定の「アースカラー」と「ソロ泊」が紹介された。リピーターの人たちは、毎年、団さんの漫画やトークを楽しみにしていた。

4日午後の支援者交流会は、院生たちの自己紹介やプロジェクトに参加しての思いから始まった。村本は、2週間前にオープンしたての伝承館に行ってきた経験を共有した。現地の方々からは、オンラインでも顔を見ることができて懐かしく嬉しいという声が次々とあがった。

十年経つところでの伝承の課題や、記録を映像や文字で残すことの意義が語られた。今、被災地では伝承に意識が向いている。十年で区切りをつけるのではなく、荒浜小学校や気仙沼の高校のように、忘れないということに社会的意識が向かっている。しかし、丸山さんによれば、多賀城では、今や津波があったことがわからない。十年経つと、小学生たちは誰一人津波を経験しておらず、実感できない世代である。市役所の職員も、半数が震災対応していない若手へ変わった。世代交代のなかで、継承は難しいが、好奇心で聞いてもらえると、東北人はたくさん話す。逆に聞いてもらわないと、寡黙で何も話さない。だから、こうやって聞いてもらえることを嬉しく思っている。絆とはずっとつながり続けることだと実感し、そんな大切なことを教えてくれたのがこのプロジェクトだったという言葉を受けた。

「自分の中で変わったことは、かつては海が好きだったのに、今では海があると不安がよぎる。どっちに逃げるかを常に考える。山に行くと安心する」という丸山さんの言葉に、あらためて震災のぬぐい難い記憶を実感させられた。映像については何度も振り返ってきたので平気で、振り返りの機会を作ってもらって、感謝しているということだった。記憶すること、忘却することの力を思った。

黒川さんは、公民館でやった最初のことを思い出すという。9年間通ってもらって、たくさん思い出がある。団先生の話を毎回職員と聞かせてもらって、アプローチの言葉に人間力を感じる。上から目線で

なく、それぞれの力を引き出すところがすごく勉強になる。鶴野先生には遊びをやらせてもらって、毎日子どもたちとお手玉をやっている。頭にちゃんと載せて、「今年もお米がたくさんとれますように」とお辞儀する遊びは、小さい子も大喜び。昔の遊びはいいなと思う。

小野さんは、今年、図書館の展示とイベント担当として関わってくれた。図書館でも、震災の伝承はミッションなので、何ができるのか考えたい。今回の展示もアンケートを見て、毎年楽しみに見てもらっていることがうかがえる。図書館では、3月に震災関連の展示をしている。去年は多賀城市の俳人のタカノムツオさんの作品の展示と震災にまつわる俳句作品の展示を行った。

今後について、丸山さんから、図書館をCCCに受け継ぐときに、「このプロジェクトは必ず続けてをやって欲しい」と引継ぎをしたことが紹介され、「団先生がお元気である限り続けてやって欲しい。図書館の誇りでもある。現地での展示とリモートでの語り合いでもいいかもしれない。リモートは近い感じがしていいなと感じている。これならば、毎年2回とかでもできるかも。こうして互いに元気な姿を見せあうだけでもいい。コロナで残念だったが、新しい形を試して可能性が開けた。」と、今後の継続についても、前向きな意見を頂いた。

黒川先生からも、今年はコロナがあり、9月11日に爆弾予告があったりで、入園式など行事もできなかった。できたとしても行事も分けてやっているとのこと。子ど

もたちの園生活にも変化があった。保育が必要な人たちなので、小中高と違い、基本的にみな通っていた。コロナは大変だが、リモートは気軽にできる。参加しやすいし、みなさんにも負担少ないのかなと思うので、是非リモートでも続けられたらと賛同の声があがった。

加藤さんは、民話の活動にもリモートを利用できるのではないかと早速、島津さんと話したという。コロナで、民話ゆうわ座もできないままだったが、小野先生にもリモートで来てもらって話すのもいいなと思った。リモートなら、語り手の映像をあらかじめ見てもらって語り合うこともできる。12時間分のDVDを作ったので、たとえば、ある部分を見てもらって語り合うなどもできるのではないか。あらためてリモートのすごさを感じる。若い方の話、映像でしか見れない語りを見てもらって、おもしろさを実感してもらおう。復興の心の病についても、簡単には解決しないが、先人の苦勞と、そこで生まれた不思議な経験を共有することで、映像など見ながら小野さんの話を聞くなどできるのではないか、そういう可能性について考え始めているということだった。

このプロジェクトを続けてきた人々が、オンラインという形であれ、再会をどれほど喜び、そこから互いに力を得ているかが画面からあふれ出て、初参加の院生たちは、感じるものが大きかったようだった。

「継続の力を感じた」、「コロナだからできることのアイディアが拡がっていくのがすごい」、「どんな時も繋がり続けることがすごい」、「それがこのプロジェクトそのもの

だったんだな」、「民話がとてもよかった。次はじかに聞いてみたい」などの声があがった。

私たちの方でも、「国府多賀城で、図書館が文化の中心になってつなげていってもらえないか」、「多賀城民話の会も冊子をまとめているから、多賀城版のDVDを作るのもいいのではないか」、「お手玉遊びに地元の大学生などに入ってもらえないか」、「伝承を前向きに明るいものにしたとき、こぼれていく人たちがいる。素材を出すだけではだめで、一緒に分かち持つことが大事なのではないか。これをご縁に多賀城がそういう役割を果たせるといい」などさまざまなアイディアが湧いた。現実の体制や連携について踏み込んで話す中で、大きな壁も感じたが、ブレーンストーミング的にいろいろなアイディアが出てくることはいい。

団さんは、コロナで時間があったからできたこととして、十年の漫画をまとめた冊子『Complete』を作成したことを紹介した。「ネガティブだけ、ポジティブだけというのはない」という言葉から、加藤さんの、「今回、思いがけず参加できたのはコロナのおかげ。毎年、民話の例会と重なって、漫画トークに参加できなかったが、コロナで1週ずれたことで参加できた。ゆうわ座のことも考えられるし、プラス思考でいこうと力をもらった」という言葉が続いた。

丸山さんからは、「やめる決断は即決できるが、コロナでもやろうと決めた村本先生。絆応援プロジェクトはコロナにも勝てるんだ！」との心強い言葉ももらったが、

私の頭のなかには、やめるという選択肢はなく、どういう形で続けられるかという問いがあるだけだった。1990年に大阪に立ち上げた女性ラフサイクル研究所は今年30周年を迎えたが、長く続けることで初めて見えてくるものがある。続けることで得られるものの大きさは十二分に知っている。ただし、今回のプロジェクトについては、一方的なラブコールだけではできなかった。だからこそ、私たちからのラブコールにレスポンスがあり、ここまで継続が実現されてきたことが本当に嬉しい。

現地の方からは、「ZOOMでの交流会では、お一人お一人から、現在の職・活動・研究に基づく思い・意見を聞かせていただき、大変勉強になりました。学生さんの質問内容や交流後の感想も聞いて新鮮でした。これまで積み重ねられたつながりの上に立ってこそ見えてくる思いや見方について、一方、新しく入って来た方がもつ関心や疑問について、世代や様々な立場の方がこのプロジェクトに参加して率直に意見交換できることは、今後も是非続けていただきたいと思えます。企画・運営に携わってくださった皆様、本当に有難うございました。」との感想も頂いた。

現地に行ってみなさんに直接お会いできないのはとても残念だが、このような形でもつながることのできるのありがたい。慣れない環境のなかで、快くご協力頂いた現地のみなさまに心から感謝したい。

リモートならではの良さも感じている。第一に、院生たちに、すべてのプロジェクトに関わってもらえることができる。そのため

に、チームを組み、担当者に土地の状況やプロジェクトのこれまでを綿密に調べて事前調査の報告をしてもらう。毎年やっていることではあるけれど、さらに時間をかけ、入念な準備をしている。いつもは担当地以外は間接的な報告だけを聞いていたものが、直接現地の方とつながることで、コミットメントが高まり、土地への思いも強くなる。

第二に、修了生たちを招いてつなぐことができる。今回、増尾佳苗さんにD-MAT隊員としての多賀城体験、プロジェクトとの出会い、大学院入学、プロジェクトメンバーとしての多賀城体験、救援活動についての研究と修論作成、現在と順を追って体験を共有してもらったことは、現役院生に大きな刺激となっただけでなく、私たち教員にとっても、違った視点から被災地とプロジェクトを考える貴重な機会となった。現地の方々にもなにかがしか新たな視野をもたらしてくれたように思う。

第三に、ほんの少しだが、ふだんは同席しない各地のみなさんをつなぐことができたこと。とくにみやぎ民話の会の加藤恵子さんには、プログラム全体に関わって頂き、さらに12月の福島プログラムの案まで頂き、感謝している。今後は、さらに現地をつなぐという試みを意識的に作ってみようと思うようになった。

今年、このように新しい形でプロジェクト継続を模索するなかで、十年プロジェクト終了後のつながり方についても少しずつイメージが拡がりつつある。最終年である来年、そしてその後についてもクリエイティブに試行錯誤しながら新たな道を探っていきたい。

## オマケ コロナになって (2022年8月29日)

ついにコロナになった。他の人はどうなのか聞いたことがないからわからないが、この2年半、自分の健康状態に注意を払う習慣が付き、かすかに喉がおかしいとか、軽く頭痛がするとか、前ならまったく気にしなかった体の小さな変化に敏感になった。そうすると、完璧に大丈夫という時と、1/100の揺らぎ的な微細な違和感(それまでならまったく気にしていないレベルの)を持っている時がある。そういう時は密かにドキドキしながら、いつもより注意しつつ、普通の生活をする。何度もそういうことはあったが、いつもそこからとくに具合が悪くなることもなく、1週間以内には消え去った。今回もそんな感じで、先に夫がたまたま小さな咳をするようになり、私の喉にもごく軽い違和感があり、お互いいつもに増して体に注意を向けていたが、特別しんどいわけでもなければ熱もないしで、普通に数日過ぎた。

ある日、車で遠方に出かけて帰った夜、「少し疲れたよね」とお互い感じたが、翌朝もとくに熱はなく、家でゆっくり過ごしていたところ、昼前、まず夫の熱が37度を越えた。「咳、喉の違和感、発熱」と並ぶと「ちょっとヤバイかな」と、すぐにかかりつけ医に電話して検査してもらった。二人ともあっさり陽性で、自宅療養となり、薬をもらって帰った。その時点で、私の方には熱もなかったが、夜から熱があがった。翌日、保健所から電話があり、ヒアリングの結果、思ったより早く療養期間が明けることがわかった。私にとっては、東北のプロジェクトに間に合うかどうか重要な問題だったので、一日でも早く明けてくれることはありがたかった。ネット情報では、体調に異変を感じた日をゼロ日として、そこから十日数えるとあり、特別しんどくもないけれど喉に違和感を感じた日から数えていいのか、それとも実際にしんどさを感じた日から数えなければいけないのか不確かだったが、保健所の人に確認すると、小さくても違和感を感じた日から数えていいということだった。いつもより敏感になっていたことが良かったのだろうし、ある意味、その分、対処が早かったと言えるかもしれない。

実は、今回、たまたま父の一周忌で実家に帰っていて、レンタカーを借り、帰りの飛行機も予約してあった。保健所のヒアリングを経て帰る日を決めることができたので(もちろん回復が順調であることが前提であるが)、レンタカーを割引価格で延長してもらい、飛行機は陽性証明と療養終了証明を出せば無料で変更ができることがわかり、すぐに手配した。3日ほどは辛かったが、熱もそれほど上がらず、何より味覚も食欲もあって、ありがたいことに回復は順調だった。高齢で持病ありの夫の方も同様に、安堵している。昨年、父が亡くなった日、夫が大怪我をして、結局、4ヶ月半ほど夫はこちらで療養したので、地元にかかりつけ医があったことも幸運だったと思う。何がどう転ぶかわからないものだ。夏休みの帰省中で仕事は最低ラインにしてあったし、ほぼすべてオンラインで可能だったので、何とか穴をあけることなくやりこなすことができた。

帰ったらすぐにプロジェクトで東北遠征となる。療養期間が明けてからも、無理をせず後遺症に注意せよということなので、引き続き気をつけよう。